

〈共同研究報告〉

## 小特集「東アジアにおける知的システムの近代的再編成」(三)

鈴木貞美

### 序

本小特集は、日本の二〇世紀前期に藝術表現とその理念に大きな変容を促した美学藝術論の展開、とりわけ感情移入美学の受容過程をめぐる論考二本と、二〇世紀への転換期から二〇世紀前半にかけての文藝表現史の新たな構想、一本で構成する。

権藤愛順「明治期における感情移入美学の受容と展開―『新自然主義』から象徴主義まで」は、題名が示すとおり、森鷗外『審美綱領』(一八九九)にはじまり、島村抱月を中心に『早稲田文学』で「新自然主義」として展開した文藝評論におけるドイツ感情移入美学の受容史を、印象主義や「情調」(Stimmung)美学への関心、また「主客融合」の観念と関係づけ、当時の表現理念における「現代性」の追求を追うもの。その軌跡を、これまでの日本における「自然主義」についての先行研究とつきあわせながら丹念にたどって、

この領域の研究を一挙に前進させる画期的な力作といえよう。

吉本弥生「伊藤尚と阿部次郎の感情移入説―リップス受容をめぐる」は、ドイツの哲学者、テオドール・リップスの感情移入美学の体系的な叙述が伊藤尚<sup>ひさし</sup>「リップス論」(『早稲田文学』一九一一年一月号)によって開始されていたことをはじめて指摘し、よく知られた阿部次郎『美学』(一九一七)との比較を通して、感情移入美学と人格主義との結びつきについて考察したもので、一九一〇年代に人格の向上が合言葉のようになった理論的土台について再検討を促す意義をもつ。

ともに、『日本研究』第三八集掲載の依岡隆児「ドイツ・ハイクの生成と俳句再評価」を一契機として、ドイツ感情移入美学の受容史を改めてたどりなおすことを基礎領域研究「文化論の基礎概念と方法」において鈴木が提起し、論議を重ねてきた中から生まれたものである。権藤論文については、フランス、イギリス、ドイツ、北

欧の広い意味での象徴主義の受容史全体における感情移入美学の果たした役割を再検討することが、さらなる課題として問われよう。吉本論文については、なお感情移入説と人格主義の関連について、リップス説そのものの検討が必要となろう。

そもそも感情移入論自体が、感情移入をしなければ他者の感情理解はなされないにしても、感情移入をしたつもりでも他者の感情が了解されるとは限らない、という逆の論理関係の検討を欠いた一方的な理想化に傾いたものであり、ヘーゲル『美学講義』に発する「気分象徴論」との関係も未だ明確にされていない。さらに、その日本における受容については、伝統的観念である「思いやり」「同情」、また「映り」「移り」などとの関係を問うこと、また人格主義においては、統覚の中心としての自我と人格の中核としての自我との関連が個々の論者において、どのように論じられているかが大きな課題として残されている。利己的行為のために他者に対して様ざまな感情移入を行うことは稀ではなく、また生命個体としての統一体を維持、展開すること、自然や他者への感情移入とは必ずしも統一的な関係にあるわけではない。

鈴木貞美「日本モダニズム文藝史のために―新たな構想」は、既発表のSadami Suzuki "Rewriting the Literary History of Japanese Modernism (translated by Miri Nakamura, *Pacific Rim Modernisms*, ed. Mary Ann Gillies, Heren Sword and Steven Tao, University of Toronto Press, 2009, pp.70-99) を、英語圏の論文集に再掲載したいと

いう要望に応え、その後の知見を加えて全面的に書きなおした試論で、まだラフ・スケッチにとどまっている。幾多の問題を検討しつつ、今後、充実をはかってゆきたい。